県勢発展に大きく寄与

地元住民ら盛大に祝う

川辺ダムと南薩縦貫道（錫山・寺野工区）が完成

県が整備を進めてきた川辺ダム（河川総合対策事業）と南薩縦貫道の一部（錫山・寺野工区）の完成式典が2日、川辺郡川辺町神殿と鹿児島市錫山の錫山バイパス入り口で、発注者、来賓ら約300人が出席して行われ、川辺ダムの完成と南薩縦貫道の一部区間供用開始を出席者全員で祝った。

川辺ダムは、薩摩半島を流れる万之瀬川の洪水調節をはじめ、流水機能の維持、都市用水の安定供給などを目的に、河川管理者（鹿児島県）、上水道事業者（鹿児島市）、工業用水道事業者（鹿児島県）の共同事業で、県土木部が手掛けた初めての多目的ダム（河川総合対策事業）として、昭和61年度に事業が採択。

その後、平成7年からダム本体工事に着手、12年度には本体コンクリートの打設を完了、13年度には左岸遮水壁の工事が完了した。その後、14年10月から開始していた試験湛水（サーチャージ水位到達）も15年2月に終了、4月からは運用を開始している。規模は、重力式コンクリートダムで、堤高53・5㍍、堤頂長147㍍、堤体積10万8000立方㍍となっており、ダム地点では毎秒100㌧の洪水調節、鹿児島市への水道用水は1日当たり5万5000㌧を供給し、鹿児島臨海工業地帯へは1日当たり2万㌧の安定供給を図れる。ダム本体の総事業費は約224億円となる。

また、南薩縦貫道・県道鹿児島川辺線は、南薩地域から県都鹿児島市への物資輸送、通勤・通学や緊急医療の充実のほか、観光周遊ルートの形成を目的に、平成6年度に主要地方道に認定。川辺町寺野工区は、昭和61年度に事業着手した川辺ダムの付替道路として平成2年度に約3・2㌔区間に着手、また、4年度には錫山工区の錫山地区をバイパスとして、約2・6㌔区間の整備に着手、そして11年度には寺野工区約1・0㌔区間に着手し、15年5月に完成した。

今回供用される区間の延長は3・6㌔で、幅員は6・0㍍、既に供用している区間を併せた計画延長は6・8㌔で、全体事業費は175億円となる。

今回は、川辺ダムと南薩縦貫道の一部の完成が、時期を同じくしたため、両完成式典を併せて挙行することとなった。

鹿児島市錫山地区で行われた南薩縦貫道の開通通り初め式では、須賀知事、松下忠洋衆議らによるテープカットと同時に、地元地権者代表と、清水小学校、田代小学校、錫山小学校らによって力強くくす玉割りが行われ、全員で同区間の完成を祝った。

その後、通り初めを行いながら場所を川辺町神殿地区に移し、川辺ダム竣工式典が行われた。式典には、須賀知事をはじめ、扇千景国土交通大臣（代理）、本県・本土選出の国会・県議会議員、地元の地権者・漁協関係者、またダム本体をはじめ関連施設などの建設に従事した関係業者ら約300人が出席。

冒頭、須賀知事、赤崎義則市長、東展弘町長、松下忠洋衆議ら代表らによるテープカットと、上野新作県議会企画建設委員長をはじめ代表者9人によるくす玉割りが同時に行われた。その後、青空に一斉に花火が打ち上げられ、それに併せて地元の古殿保育所の児童ら30人による紙風船飛ばしと、田代小学校の生徒30人による器楽演奏が行われ、竣工式に花を添えた。

場所を移して行われた完成式典の冒頭、須賀知事が「21世紀かごしま総合振興計画において、災害に強く地域に活力を与える鹿児島づくりの一環として、進めてきた南薩縦貫道の一部と川辺ダムがめでたく完成し、開通及び竣工式を迎えられたのも、地元地権者をはじめ関係各位のご支援・ご協力の賜物と感謝しております。今後も県政発展のために、更なる社会資本整備を進めていきたい」と式辞を述べ、赤崎義則鹿児島市長からは「17年にも及ぶ期間を経て、ようやく今日の完成式典を迎えられたことに、地元地権者をはじめ関係各位に対し敬意を表したい。今後、同地が互いの観光利用及び、人と人との心のきずなを結ぶ役目となることを祈念したい」と挨拶。続いて、西原幸男鹿児島土木事務所長から南薩縦貫道路について、浜田行弘加世田土木事務所長からは川辺ダムについて、それぞれ事業経過が報告。扇千景国土交通大臣（代理）、松下忠洋衆議らの来賓祝辞並びに来賓紹介と祝電が披露された。

式典の後には、上山田太鼓踊り保存会のメンバーによる太鼓踊りが披露され、出席者全員で同ダムの完成と供用開始を祝った。

テープカット等で完成を祝った川辺ダム竣工式（上）と南薩縦貫道（錫山・寺野工区）完成式

「公共工事の行方」

～今何が必要か～

県測量設計業協会主催　講演要旨

県土木部長　加藤　憲一　氏

我々は何をすればよいか。

1カ月程前に放映されたNHKTV「プロジェクトX・地図のない測量150日」というのがある。ギニアでの測量マンの話だが、私も気に入りビデオに収録し何度も見なおすことがある。これからの公共事業を進めるに当たって我々は何をすべきかについての哲学がそこにはあるからだ。「地域に感動を与える」「自らが感動する」。我々が少し忘れかけているテーマを思い起こさせてくれる。

私は「技術屋」として、地域住民の根っこ部分にある真の要望にはどんなものがあるかを、常に問いかけしながら仕事に努めてきたつもりだ。ところが、まさかここまで景気の低迷が続くとは思ってもいなかった。

県の平成3年度土木予算は約1300億円、10年度は約2500億円もあった。ところが14年度は約1600億円に激減した。そのため「受注額が少ない」という声が私の耳にも入ってくる。先日、国内最大手の運送会社の元社長の講演をきく機会があった。「アメリカの景気回復は約1、2年かかるでしょう。日本はアメリカ経済に影響されるわけだから、経営は、アメリカの合理主義や市場原理の考え方をそのまま追認しているわけだから、その間にいろんな企業がつぶれていく。いやむしろ、どんどんつぶされていくのだ」という話をしていた。さらに続けて「世の中が好況のときは経営のハンドルを離していてもいいけれど、不景気のときはそんなわけに行かない。先をどうやって読みきっていくかが大事で、ハンドルさばきには十分気をつけなければならない」というような話をされていた。そのような中、我々公共事業者は何をなし、どういう方向性を指し示すべきなのだろうか。

これまでの経済は自然の流れに沿って、例えば平成の前半までは与えられ

公共事業は重要な基幹産業

「地域守る建設業」県民にアピールへ

ルさばきには十分気をつけなければならない」という話をしていた。さらに続けて「世の中が好況のときは経営のハンドルを離していてもいいけれど、不景気のときはそんなわけに行かない。先をどうやって読みきっていくかが大事で、ハンドルさばきには十分気をつけなければならない」というような話をされていた。そのような中、我々公共事業者は何をなし、どういう方向性を指し示すべきなのだろうか。

これまでの経済は自然の流れに沿って、例えば平成の前半までは与えられ

業も、まっすぐ走っていけばよかった。ところが、今は先にレールが見えない。次世代の後輩たちにどうやって新しいレールを敷いてやるのか。このことについて産学官が一体となって真剣に議論していかないと、とんでもないことになる。このまま

論がかわされている。このテーマは議論をすればするほど、皆さんの知恵が必要になってくる。第二は地方分権の問題。自らがわが町を考える時代に、地域づくりにおいて測量、コンサル業の方々がどのような形で関わっていくかが、今後の大きな課題ではないか。次に行財政改革の問題。「予算が少ないから仕事がない。景気が悪い。だから予算を増やしてください」と、どの協会団体もまずおっしゃる。しかし、もうそのような考え方では

業費のなかでどれだけ利益を出すか、どのように工夫したのかが重要だと思われる。

仕事の進め方についてだが「できるだけ早くやります、がんばります」。いまの時代、そんな呑気な話ではない。「いつまでに、何月何日までに仕

が、利益より大事なものがある、それは「信頼」である。その信頼なくして公共事業はない。景気が悪いからといって粗悪品をつくり、事故を発生させてしまっては大変なことになる。また現場の職員が時間に追われ、住民の方々に対する説明が不十分になれば、これが結果的に地域からの信頼を失い、「公共事業不要論」を生んでしまうことになる。予算が減らされ、そうなると仕事がなくなり、雇用がなくなる。さらに悪循環が生じ、最終的には建設産業全体がつぶされてしまうという怖さがある。

公共事業は地域の重要な基幹産業である。その産業に携わる皆さんが、

上げます」とまさに時間との勝負に入ってきている。他人の言葉の引用だが、「常識を破ること」「惰性の経営から脱皮すること」。これが議論のポイントだ。

企業にとって利益を追求するのは当然の目標だ。

している。しかも、この地域が安全に守られ、安心して生活できるのも建設業に関わる様々な人々によって支えられている。このことを私もアピールしていきたい。まさに混迷の時代に、奇策はない。事業量が少ない中でどのように利益率をあげるか、効率性しかないと思う。これは奇策でもなんでもなく、できることを着実にスピーディーにやることだろう。体にしみついたものは簡単にはいかないが、なんとか変えてみたいと思っている。

何回も繰り返すが、「地域が何を望んでいるか」「次世代に何を残すべきか」「地域に信頼されているか」「効率性に努めているか」などの視点が公共事業の行方を左右するであろう。